第６回　魅力と活力ある県立高校づくり検討委員会

日　時：平成１９年5月２８日（月）
　　１３：３０～１５：３０
場　所：サンラポーむらくも　２Ｆ　彩雲の間

会長挨拶

本日は第６回目。テーマは専門高校のあり方が中心になる。

前回は、高等学校の今後のあり方について幅広い意見の交換があった。教育長や教育監からは、基礎学力を高めながら、体力や生活習慣についても、もう一回きちんと位置づけ直す必要があるのではないかとか、幼保、あるいは小中高をとおした島根の教育理念を考えるべきだという視点も提起された。

２１世紀は「知識基盤型社会」とか「ポスト工業化社会」と言われる。地域における文化力とか広い意味での人間力を、どのように地域で育てていくのか。そういう広い視点から高校のあり方をもう一回考えないといけない。そして、そういうコンテクストの中で、普通科だけでなく、本日の主要議題である専門高校についても考えないといけないと感じている。

出欠確認

・寺本淳一委員、宮脇委員、中川委員、平川委員は欠席。
・教育長は、急遽別の公務が入ったため、欠席。

議　事

議題（１）専門高校（職業系学科及び職業系系列）のあり方について事務局から説明。
（資料１～５）

〇委員

企業の代表者が集まった時などに話すのは、家庭教育が悪くなったとよく言うが、その責任の大半は企業主にあるということである。

「自分の会社ではこういうものをつくり、月産このぐらいで、売り上げは幾ら」と言う企業主は、残念ながら家庭教育を壊す原因の一つをつくっている。よい企業主は「自分の会社ではこういうものをつくり、こういうものに組み込まれて、こういう人たちに喜びを与えている。そういう貢献をしている」と答える。

前者は「もっと能率を上げろ。危機感を持って頑張らないと会社はつぶれる」と盛んに従業員に言い、会社のために残業や休日出勤を勧める。そういう会社の従業員が家庭に帰って、子供に「もっと勉強しろ。もっと頑張れ」と言うと、子供は、親のために勉強をし

ろと言われているように感じてしまう。

一方のいい方の企業主は、「商品を通じてこういう幸せを人々に与えているから、より多くの人に幸せを与えるために、残業もしようじゃないか、休日も出ようじゃないか」という指示の仕方をする。そういう企業の従業員は、子供に対しても、ある程度の目的や目標を持たせてがんばらせるのではないか。３０点をとって帰った子供には、今度は４０点を目標にしようというように。

こういうふうに経営者の姿勢が家庭教育にまで影響を与える。経営者ももっと考えないといけない。もっと考えてくださいと話すようにしている。

同じことがこれからの学校教育についても言える。きれいなうたい文句だけで終わるのでなく、実際に行われる教育が、もっと生徒に希望を与える、社会への貢献という考え方が生かされたものになってほしい。

学校訪問で、ある専門高校の実習を見学した。実習設備は非常にきれいにしてあったが、周辺にある棚は何年に一度掃除をしたのかという汚れ方であった。本当の教育は、こういう自分とは直接かかわらない周辺の部分もすべてを含めたものであるべき。

本日配布された資料の中でうたわれている教育の理念や目標も、そういう周辺もすべて含めて社会に貢献できるものであってほしい。この資格を取りなさいではなく、こういう貢献をするために資格を取るのだ、だからこういう資格を選んだらどうかと話す。そういうやり方で高校に魅力を持たせていったらどうか。

○会長

今、県の経営者協会も、企業の社会的貢献とか社会的責任ということ、あるいは、教育環境とのかかわりというような議論をしている。一人一人の子供が未来を選びとっていく上で、実は企業と親とのかかわりが非常に大きいということも指摘されている。

○委員

学校運営費の資料について質問だが、例えば普通科で言えば、７学級以上の学校もあると思うが、表にないのはなぜか。

○事務局

学科別、学校規模別の比較ができるようにするため、複数の大学科を設置している学校や、分校、定・通の併設校については、除外している。

○委員

そうすると、一番下の全学科の平均値は上の表の平均か、除いてある学校も含めた全体の平均値か。

○事務局

上の表の平均値である。全・定・通すべての学校の運営費を在籍生徒数で除すと約９１万円となる。

○委員

文科省が算出した都道府県単位の地方教育費がたしか１２０万くらいだったと記憶するが、それとこの資料の学校運営費との差はどう考えたらいいか。

○事務局

文科省の地方教育費調査の数値とこちらで作成した資料とは、引いてきた数字に違いがあると思われる。こちらで作成した資料は、学校ごとに区分できる費用だけを集計した。

○委員

ということは、各学校にかかる経費は、９１万掛ける在籍生徒数でほぼ全体の額になるという理解でよろしいか。

○事務局

そうである。

○委員

大規模校と言われる、８学級、９学級の学校を除いたデータということか。

○事務局

学科別、規模別の比較ができるようにするため、複数の大学科や定・通を併設する学校は除外したので、御理解いただきたい。

全体の傾向としては、普通学科について言えば、規模が大きくなるにしたがって生徒１人当たりにかかる経費は小さくなっていく、つまり効率的になっていくという傾向が見られるので、大規模校ではよりそういう傾向になるのではないかと推定される。

○委員

「専門部会での主な意見」の中で、専門学科の比率を高めるべきだということが書いてあるが、そう考えられた理由と言うか、こういう状況なので専門学科の比率を高めるべきだという、考え方の背景が知りたい。

また、一番最後には、「生徒や保護者の希望も大切だが、政策的に専門学科の比率を高めるべきだ」という記述もあるが、そう考えた根拠を教えていただきたい。

○事務局

産業振興や人口流出という本県の課題を考えた場合、高校卒業後に県内に残る生徒の割合を見ると、やはり専門高校の方が高いという状況がある。そうした観点から、政策的に専門学科の比率を高めるべきという意見である。

専門学科部会の委員は、ほぼ全員が専門高校の校長である。そういうこともご理解の上、お読みいただきたい。

○委員

高校の校長会としては、専門高校からこういう意見が出るのは非常によくわかるが、普通科部会では、この比率についてどういう意見が出ているか。

○事務局

普通科等部会は今後開催する予定である。

○委員

「生徒・保護者の希望も大切であるが」と書かれているということは、生徒・保護者は普通科の希望が多いということか。

また、中途退学者の専門学科と普通学科の比率は教えていただけないか。

○事務局

第５回検討委員会で中学３年生の進路希望調査結果に関する資料を提出しているが、その資料によると、年によって多少変動することはあるが、公立全日制課程の希望者のうち約６０％が普通科を希望しているという状況である。

「生徒や保護者の希望も大切であるが」というのは、そういう傾向は承知しているが、産業振興とか人口流出という観点からみると、専門学科の比率を高めた方がよいのではないかという意見である。

中途退学者の専門学科と普通科の内訳は、今資料を持ち合わせていない。

○委員

専門学科として維持できない場合に、総合学科として残していくことはこれからの高校のあり方として非常に大事な論点だと思うが、「専門性という観点では中途半端になりがちで、生徒は安易な方向に流れやすい」とはどういう意味か。

○事務局

総合学科は、普通教育、専門教育にかかわる幅広い科目の中から、生徒が進路希望や興味関心に応じて選択履修する学科である。一方、専門学科は、基本的に特定の分野の専門科目を中心に履修する学科である。このような学科の仕組みの違いから総合学科は中途半

端になりがちという意見もある。

〇委員

専門学科と総合学科で、専門性の部分で差が生じてくるのはやむを得ないと思うが、そういった仕組みの中で生徒が安易な方向に流れるというのはどういう意味か。

〇事務局

単位が取得しやすい科目とか、そういう方向に流れやすいということである。

〇会長

県立大学の総合政策学部とか、慶應大学の総合政策学部ができたときに、そういう懸念があったが、プログラムとかカリキュラムの構成で、そう簡単に安易な選択にならないような工夫をした。

〇委員

総合学科をつくったのはいいが、教員の意識がそれまでとあまり変わっていないということはないか。つまり、本来の理念が生かされた総合学科になっていないのではないか。本当なら、子供たちが自由に科目を選ぶことで、それまでと全く違ったものが出てくるはずだったと思うが、本当にそういうふうに機能しているのか。

〇事務局

専門学科の場合は、自分の専門から抜け切るのはなかなか難しいと思う。それは学校に限らず、他にも同じようなところがあるのではないか。

〇委員

今回配付いただいた「魅力ある専門高校をめざして」という資料で、専門高校はこういうことが求められている、基本的な考え方はこうであるということが示されているが、できれば、初回のときに、全部の校種についてこういう資料を配布していただいて、それをもとに討論をした方がよかったのではないか。次回、普通高校のあり方についての資料が出されたときに、この前の専門高校のときにこういうことも言っておけばよかったということが起こりはしないか。

〇会長

基本的には柱を立て議論しているが、全体像とのバランスとか他の分野との突き合わせといったことも考え再検討して、全体的なイメージをつくるという作業はぜひ必要だと思う。機械的にあるテーマだけを議論するのではなくて、会を進めるごとに立体化し、議論

を集約するような努力もしたいし、事務局の方でも今の意見も踏まえた対応をお願いしたい。

○委員

「魅力ある専門学校をめざして」というのは平成１６年に出されているが、それは、今の専門高校の教育の中に生かされていると考えてよろしいか。

○事務局

これを踏まえて、県教委、各校で取り組みを進めている。

○委員

専門高校から入学する人たちは、全員ではないが、前向きというか、学習意欲があるように感じている。

それと、近年情報科学高校の充足率が低いと言われたが、特別な理由があるか。

○事務局

安来市の中学校卒業者は、従来から松江市や県外への進学者がいたが、それが近年増えてきており、地元の高校への進学者が減ってきたということである。松江市や県外への進学者が増えた原因は正確には把握できていない。

○委員

「マナーアップの支援」とあるが、何のマナーアップなのか聞かせていただきたい。

それと、総合学科について、専門性という点で中途半端だという意見と、専門学科として維持できないなら総合学科の系列として取り入れてはという意見があるが、その２つの意見は相反しないか。意見がそのように２つに分かれているということか。

○事務局

マナーアップとは、企業や社会での言葉遣いや礼儀・作法のこと。

総合学科に対する２つの意見は、相反するものともいえるが、そうでないともいえる。専門学科の立場からいえば、やはり専門分野に集中して学習してほしいし、その方が生徒にとってもよいのではないかという意見がある。ただ、もう一方では、生徒数が減少する中で、学科として維持するためには１学級４０名の生徒が見込めないといけないが、４０名は見込めなくても、その専門分野の学習をしたいというニーズはある。ならば、総合学科の系列として専門分野を維持する方法もあるのではないかという意見もある。

○委員

「魅力ある専門高校をめざして」には崇高な目標が掲げられているが、先ほど専門学科部会で出された意見と比べてみて、本当にこの目標を尊重した検討の結果だろうかと疑問に思いながら聞いていた。こういう立派な目標が出ているなら、これを具現化するためにはどうしたらいいのかと検討すべき。現場の現実と理念は乖離するところがあるかもしれないが、やはり現場と教育理念を結ぶプロセスは重要ではないか。

○会長

大変悩ましい問題であるが、論点１の「普・専・総の比率はどうあるべきか」ということを中心に、意見を闘わせていただきたい。

○委員

専門学科に進むと就職、普通科だと大学進学を目指すという色分けが当たり前のようにされているが、専門学科を目指している子供たちの中には、早くから専門的な知識を学びたいけれども、基礎的な部分を学んだ後は大学や専門学校にも進みたいというニーズがかなりあるのではないか。

○委員

「魅力ある専門高校をめざして」は、専門高校に焦点を当てて記入されているが、これは専門高校だけではなく普通科の高校にも十分該当することだと思う。職業観とか勤労観は普通科の高校でも必要だし、専門高校も半分は進学という状況なので、ここの内容は両方に生かしてほしい。

各高校の充足率を見ると、１００％充足している高校は少なくて、若干低いところが多い。高校の定員は子供の数をもとに決められていると思うが、そういう中にあって充足率が満たされていないということは、子供たちが高校教育にどういう魅力を感じているのかを、高校教育全体として考え直す必要があるのではないか。

政策的に専門学科の比率を高めることも大事だが、子供や保護者の希望も大切にしながら政策を考えていただきたい。人口流出というが、県外に進学して戻ってきたいと思っても、職場がないため戻れないのではないか。もう少し広い視点で政策を考えていただくといい。そうでなければ、不本意入学で退学とか、県外の高校に進学するとか、こちらが思っているのとは逆の現象が起こってくるのではないかと懸念する。

○会長

島根県立大学でも、高校と大学をつなぐキャリア教育的なことを考えていて、近く具体的に実現する可能性もあると聞いている。そういう視点から考えると、「魅力ある専門高校をめざして」という資料は全高校に該当する面を持つのではないかと私も感じている。

そのことを踏まえて、普・専・総の比率については、広い視野で考える必要がある。もちろん先ほどの専門部会での意見も踏まえなければいけないし、近く持たれるであろう普通科の方の意見も踏まえなければいけない。先ほど言われたように、総合的な視野でこのバランスを考えなければいけない。

○委員

どのニーズを優先して、どういう比率にするかということは非常に難しいが、一般的に考えると、中学生で学科を選択するのは非常に難しい。ただ、経済や社会が今どういう状況にあるかという情報を正しく伝え、現時点でのニーズが把握できる状況をつくることは大事ではないか。

また、「政策的に」という話が先ほどあったが、「政策的に」と書いた以上は、その政策をきちんと示さないと誤解を生みやすい。政策が示されていれば、それについて考えていくことができる。

○委員

１０年前の議論では、生徒の通学圏域に総合学科を１校つくるということで出発した。中高一貫もそうであった。ところが、財政状況が厳しい中では、そういうことはもうできないのではないか。

前回の再編成の議論でも、この学科は大切だ、あるいは地域的にこの学科だけは残そうという形で議論した。その中で、子供たちのニーズに合わない、あるいは子供たちが入学してこない現実をどうすればいいかということで松江農林に総合学科を入れ、その途端に志願者が増えた。

議論の視点として、そういうこれまでの流れを踏まえながら議論するのか、全くフリーでゼロから議論するのか、どういうベースで議論するのか。

○会長

２番目の論点、「職業系学科（系列）の基本的な考え方はどうあるべきか」ということについても、御議論いただきたい。

○委員

「魅力ある専門高校をめざして」は確かに崇高だし格調も高いが、その具現化を、どう各学校に働きかけていくかという議論がないといけない。逆に言えば、ここに書かれていることが各専門高校でなされたら、志願者は自然に集まると思う。

松江高専の場合、以前は工業高校に行くか高専に行くかという選択だったのが、今は普通高校との選択になっている。それは、生徒が魅力を感じるものが松江高専に出てきたということ。だから、県立高校でもこれだけすばらしい理念や目標があるならば、それをど

ういうふうに現場で生かしていくかと考えないといけない。

また、教員には普通高校と専門高校の間の転勤があるわけだが、例えば国語であれば、普通高校で教える国語と専門高校で教える国語は違うと思う。教科指導は専門学科の教員だけではなく、すべての教員が取り組んでこそ学校の魅力づくりになるから、そういう意味で、普通科の教員も含めた学校づくりがどうなっているのか聞いてみたい。

○会長

論点３の「全県的な専門高校・学科の配置をどのように考えるか」にかかわった議論でも結構です。

○委員

先日、私の住んでいる地元の高校の専門学科の生徒と、同じ地域の中にある養護学校の生徒の交流会があった。農業を学んでいる高校生が、自分たちが生産した農作物を使いながらいろんな食品づくりで交流した。それにかかわった近所の生徒に話を聞いたら、自分は家が農家だから農業をやらないといけないと思って頑張っているが、農業を通して別のこともできるんだということを非常に感じたと目を輝かせて言っていた。

職業系の学科は、その職業の動機づけをするとか、基本的な専門性を習得するとか、いろいろな目標や目的があると思うが、専門科目を学ぶことで、自分が学んだことが社会でどう生かせるか、その専門性を生かすことで、地域の人たちとどうかかわっていけるかということを広く経験をさせる場でもある。

専門高校で学ぶことは、大学で学ぶことに比べれば本当に基礎的な部分にすぎないかもしれないが、それを通して自分のこれからの職業なり生き方なりを考えさせることが、専門高校の一番大切な部分ではないかと思う。そういうことを本当に実践していこうとするならば、もっと違う専門高校のあり方も考えないといけないのではないか。

○委員

「魅力ある専門高校をめざして」の「専門高校に求められているもの」を見ると、産業界が大きく変化してきたため、専門高校での教育と企業が求める能力との間にミスマッチがあるということも記されているし、専門高校を卒業した人たちが、どれだけ学んだことを生かして職業についているかという指摘もある。

そこで、産業界においでの委員さんにお聞きしたいのは、専門高校の卒業生にどういう能力を求められるのかということである。普通科で求められる能力と専門高校で求められる能力は近づいているし、専門的な能力を専門高校で身につけてもすぐに役立つ状況ではなくなりつつある。むしろ意欲とか生涯にわたって学ぼうとする力が求められているのではないか。

○委員

専門高校の生徒に身につけておいてほしいのは、これから勉強していくための方法。こういうことを知りたいときにはこういうところを調べなさい、こういうものを勉強しなさい、こういうものを読みなさいという勉強の手段を教えてほしい。

○委員

専門高校としてきちんと教育し、一つのことをマスターさせるには苦しいことがたくさんある。ところが、現代の子供たちはそういうことを好まない。だから、生徒が集まってこない。募集をかけていくためには、できるだけ苦しい部分を排除して、表面をよくする必要がある。しかし、総合学科は、一見きれいだがその実子供が育っていない。

また、そうなると、職業高校の教員はプロフェッショナルだから、自分の専門分野に関するさわりの部分だけを教えておけばいいというのでは、なかなか本気になれない。

本当は、忍耐力とか意欲とか、そういうものが企業に入るときに一番必要だと思うが、それに結びつかない。御機嫌取りの学校をつくってしまう。本来それは逆だと思う。あそこの学校へ行ったら、苦しいけれど、これだけのことは身につくというのが職業高校の魅力ではないか。

○委員

魅力というのは、職業高校の場合、求められることだと思う。社会とか企業から求められるということ。求められるためには、どれだけのことをしておけばいいのかという徹底した検討が必要。先ほど例を挙げたが、機械そのものはきれいでも、周辺はできていないということでは魅力に通じない。

○委員

前回、山形県の工業高校の話をした。例えば、水産高校をどうすべきかというときに、一番参考になるものとしてそういう事例があるのではないかと思う。ぜひ調査をしていただきたい。

長野県に斑尾高原農場という農場がある。ここの社長は全く農業の経験がない人だが、５反の山を買って、そこでブドウを植えて農地として認められ、苦しい経営の中、全国に１０店舗ぐらいの店を持つ社長である。

その店の新入社員は、最初はレストランのウエイターから始めて、何を先に食べたか、どんなふうに食べたか、何を残したかと勉強する。次に厨房に入って、その次には加工に入って、さまざまなことをそこで学ぶ。そしてようやく農場に出してもらえる。したがって、その店は、農業をやる１次産業部門、製造をやる２次産業部門、サービスを提供する３次産業部門と、一つの職業でありながらさまざまな要素を持っている。

これからは、農業高校を出たからこういう仕事ということではなくて、さまざまな仕事

や経験を積まなくてはならないということである。

今回の市町村合併によって周辺となった地域は、限界集落がどんどん増えている状況である。そういう中で、地域の文化や人と人のつながりをはぐくんでいくのに、合理性だけを求めていていいのだろうかと思う。格差に合わせた政策をし、政策に合わせた統合をしていけば、結局格差を助長してしまうことになる。道州制という形になると、島根県自体が周辺になってしまう可能性もある。

「資源有限、人材無限」ということを考えたときに、島根県こそ人を育てる環境を守っていく大事な地域ではないか。地域に住む者として、何が継承され、何が利点として受け継がれていくべきなのか、そんなことも考えていく必要があるのではないか。

○委員

全県的な専門高校・学科の配置について考えようとしているわけだが、これは大変難しい話になる。例えば隠岐で言えば、平成２０年代の初めごろにはどこかで１学級減をしなければならない。そのときにどこをどう減らすのか。

簡単に減らすことはできないということで１０年前に総合学科構想が出てきた。そういう１０年前の議論をベースにして話していくのか、フリーで一から話すのか。そこをもう少し明らかにした上で、どう考えるか問いかけないと、一般論で話していれば残せばいいということになる。

残すのであれば、例えば、隠岐水産高校へ、全国から２０人、３０人の生徒が集められるような制度をつくってほしい。水産学科がなくなった境市から水産希望の生徒を全部呼んでくるくらいの思い切った政策をしてほしい。

○事務局

基本的には前回の流れを踏まえながら、修正すべき点があれば修正するし、進めるべきところは進めるということではないか。

○委員

「検討のポイント」の３番の選択肢を見ていたら、魅力と活力という議論は出てこないと思う。隠岐の話も出たし、中山間地域も本当に大胆なことをしないと学校をなくさざるを得ないと思う。

やるのであれば本当に具体的な取り組みをしていかないと、１０年後にこういう委員会が持たれたとしたら、「魅力と活力」という名前はつけられなくなってしまう。島根県の場合は少子化だけではなく人口減という問題もあるから、そういう視点も入れていかないと、１０年後は中山間地域から学校が消えていくことになる。定住対策とか地域振興ということも絡んでくるのではないか。

○委員

西部の高校も３学級以下が多いが、地域では学校がないと地場産業が大変だという状況である。だから、自治体としても、何とか県立高校が元気を出して優秀な高校生を育て、企業を地元に連れてこようという取り組みを始めている。

ところが、資料を見ると、西部の工業高校の配置をどうするかとか、単純に全国と数値で比較してあったりして、地域の取り組みに水をさされたような気持ちである。確かに雇用の場は少ないが、優秀な高校生がいれば新しい企業が来てくれるのではという思いもある。また、こういう取り組みを通じて、地元の高校に魅力や活力が生まれたら、地域に対して貢献することにもなるのではないか。

実際に物をつくり上げるとか物を育てるということを、社会に役立つ体験としてできるのが高校時代だと思う。小学校、中学校ではなく、高校時代に、物をつくる、育てるという感動を味わう機会を与えてほしい。

○委員

県内の建設建築関係の若手経営者でいろいろな話をすると、資格はもちろんある方がいいが、それは公共事業を受けるときに法律上必要なだけで、実際には測量実習とかＣＡＤとかいった基本的なことをしっかり身につけて来てもらいたいという意見が多い。そういう力があれば入社してすぐ戦力になる。資格は入社してから取っても全く問題はない。幾ら資格を持っていても、基本的なことができない人は企業にとってありがたくない。カリキュラムを考えるときにそういうことも意識していただきたいと思う。

○会長

やはりこの１０年の間の社会の変化がある。その変化を直視して、それに適応しつつ、しかし流されるのではなく、逆にどうしたらこの地域をよりいいものにしていくかと考える。変化に適応しつつ、変化に立ち向かっていくという２つの命題を、どのように結びつけるかというのが今日の議論だったと思う。

今回出された３つの柱は、具体的なことを考えれば考えるほど答えの出しにくい問題であった。次回は普通科について議論することになるが、議論の幅を少しでも狭めることができて、少しでも合意に近いものにしていければありがたいと思っている。

教育監挨拶

今日は専門高校のあり方ということで意見を伺った。次回は普通高校の校長先生方の意見をふまえてということで、またもとへ返る部分もあるかもしれない。

魅力と活力ある高校というのは、子供たちが高校にきらきらした魅力を求めて入学する

ということか、高校を出た後きらきら魅力を発揮するということか、そこらあたりも大きな問題ではないかと思っている。

今日は財政的な資料も示したわけだが、教育委員会としては、高校にとって最もよい形を優先して考えたい。みなさんにも高い見地から議論いただければと思っている。